

幼児の音楽表現の理解と指導

— 小学校教育への橋渡しをふまえて —

稲木 真司

Understanding and Teaching Musical Expression for Children — Bridging to Elementary Education —

Shinji INAGI

1. はじめに

近年、様々な分野において、「幼少接続」や「小1プロブレム」といった言葉を目にするようになった。これは幼稚園や保育園を卒園して小学校に入学すると、生活リズムや生活ルールが著しく変わることによって、その新しい環境に慣れていけない子どもたちがいるためである。幼稚園における指導内容は、文部科学省が公示している「幼稚園教育要領」に示されているが、新しい学習指導要領に伴い、「幼稚園教育要領」も改訂され、平成29年3月に公示された。新しい幼稚園教育要領や学習指導要領を見てみても、目標となる子どもの姿や身に着けたい知識や能力について一貫性が保たれているが、現場での実践においてはどうか。これらの教育要領や指導要領が実際に施行されるまでには、数年間の移行期間を経ることになっているが、ここでは、今回新たに示された幼稚園教育要領と学習指導要領の内容をふまえて、音楽教育および音楽的表現の観点から、小学校教育へとつなげる幼児の音楽表現の理解と指導について述べる。

2. 幼稚園教育要領における音楽的内容

大変興味深いことであるが、現行の幼稚園教育要領においても、新しい幼稚園教育要領においても、「音楽」という言葉は一度しか出てこない。それは以下のような表現として使われている。(文部科学省 2017)

旧：「表現」の第2項 「内容」

- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

新：「表現」の第2項 「内容」

- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

一目瞭然だが、現行の教育要領から新しい教育要領になっても、この文章は一字一句変わらずに残っている。ちなみに、それぞれの教育要領の中で「歌」や「楽器」という言葉も一度しか使われていないが、ともにこの「表現」の「内容」で使われているのみである。

ひとつ興味深いのは、「環境」の領域にはこれまで11あった項目に第6番目として以下の内容が追加されている。(文部科学省)

(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。

そして、この内容について以下のような説明が述べられている。(文部科学省)

「文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国家、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること。」

大変興味深いことに、実は現行の幼稚園教育要領では、ここに出てくる「国歌」「唱歌」および「わらべうた」という言葉も使われていなかった。

小学校の音楽科教科書には、すべての学年において「君が代」が掲載されており、各学年の目標やねらいに則して適宜指導することとなっているが、実際の現場では、「君が代」についてその歴史的背景や、特記すべき音楽的特徴などについてあまり指導されていないのが現状である。最近の幼稚園および保育園では、わらべうたや童謡よりも「現代歌」が好まれる傾向がかなりあり、子どもの発達段階や音楽的能力を考慮しないで、子どもたちの好きな曲や流行の音楽が題材として用いられることが少なくない。

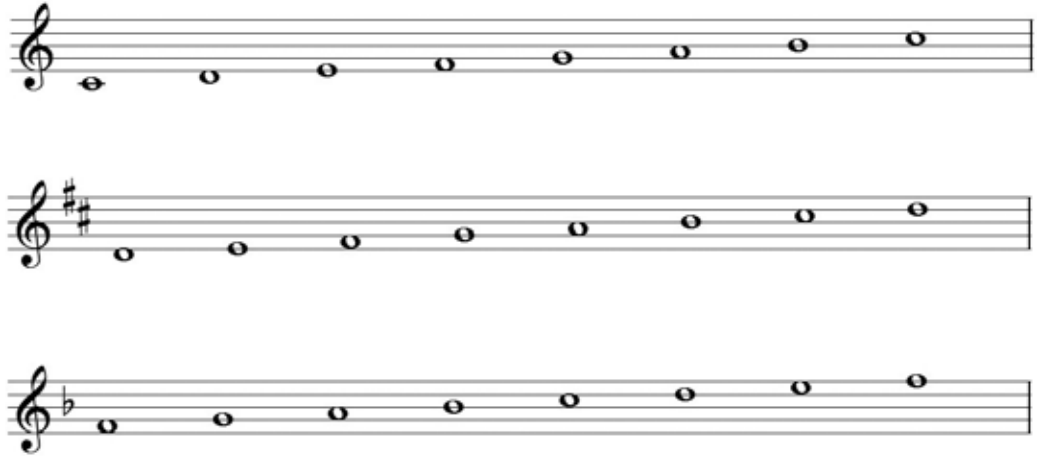
3. 子どもたちが触れる音楽の特徴

(1) ダイアトニック音階とは

現代社会において、我々や子どもたちが触れている音楽に関して言うと、およそ9割以上が西洋音楽を基にした音楽と言っても過言ではないであろう。子どもたちが普段見ているテレビやその他のメディアを通して流れている音楽に関しては、ほぼ100%が西洋音楽に基づいていると言って間違いない。ここで言う「西洋音楽を基にした音楽」というのを正確に定義してみよう。西洋音楽は古代ギリシャから長い時間をかけヨーロッパで発展したものだが、中世においては「グレゴリア聖歌」などの教会音楽を基盤として発展してきた。作曲家・オルガニストとして有名なバッハが活躍していた、バロック時代には、既に現在の「西洋音楽」の基礎ができ上がっていた。これは今では小学校の1年生の教科書にも載っている「ドレミファソラシド」を基にした音楽である。この7音音階(オクターブ上のドは数えない)のことを、専門的に「ダイアトニック」音階という。

先ほどの「西洋音楽を基にした音楽」というものは、すべて「ドレミファソラシド」というダイアトニック音階を基にして作られている音楽ということである。

譜例1はダイアトニック音階の例である。上から順番に、それぞれハ長調、ニ長調、ヘ長調のダイアトニック音階を示している。



譜例1. ダイアトニック音階の例

図1のような楽譜を見ることは、幼稚園ではまずないだろうが、五線譜の楽譜が小学1年生になると音楽科の教科書にはじめの数ページをめくると突然現れる。幼稚園で譜読みを教える必要は全くないが、小学1年生になって突然五線譜が出てくるのは何とかしなくてはいいまいだろうか、それについては稿を別にしたい。

それでは、子どもたちがこのダイアトニック音階をどのように認識しているのか、また幼児や児童を教える幼稚園教諭や小学校教諭がそれをどのように理解し、また教えているのか考えてみたい。

現在、日本の小学校で使う音楽科の教科書は2社からしか出版されていない。ダイアトニック音階「ドレミファソラシド」は、どちらの教科書も1年生の教科書に登場するが、それぞれどのように示されているのか見てみる。図1は、教育芸術社の「小学生のおんがく1」である。(教育芸術社 2016)

教科書ではもちろんフルカラーの印刷になっているが、色とりどりの風船が1列に並んでおり、低い「ド」の音から、1オクターブ上の高い「ド」の音まで順番に示されている。これを見て、違和感を覚える人はどれほどいるであろうか。先に挙げたダイアトニック音階の譜例でも、「ドレミファソラシド」は五線譜に等間隔に音符が並べられていたが、実際にそれぞれの音程の差は等間隔になっているのだろうか。

ダイアトニック音階において、隣同士の音(音楽理論的には「2度」の音程)は2種類存在する。これはいわゆる「全音」(長2度)と「半音」(短2度)である。ピアノなどの鍵盤を見ると一目瞭然なのだが、



図1. 教育芸術社 (36ページ)

黒鍵がない部分が1オクターブの中にふたつあり、その「ミーファ」と「シード」の音程は他の隣り合った音程よりも狭くなっている。この日本語で「音階」という言葉だが、これは英語の「スケール」(Scale) という言葉の訳語である。つまり「音の階段」というような意味になっているが、この教科書では等間隔にダイアトニック音階が示されているため、子どもたちは普段学校で上り下りしている階段をイメージして「音の階段」を理解してしまうのではないだろうか。

一方、教育出版の音楽の教科書では、風船ではなく、図2のように階段として示されている。(教育出版 2016)

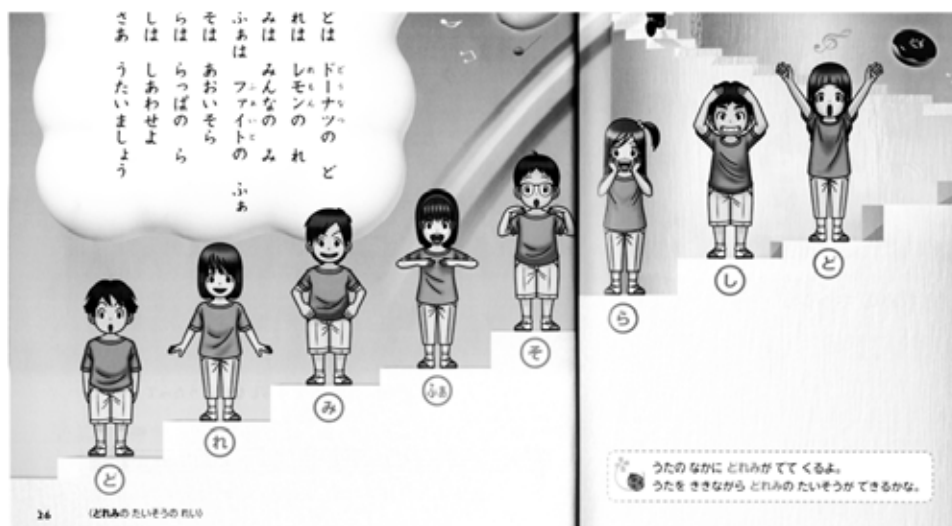


図2. 教育出版の教科書 (26-27ページ)

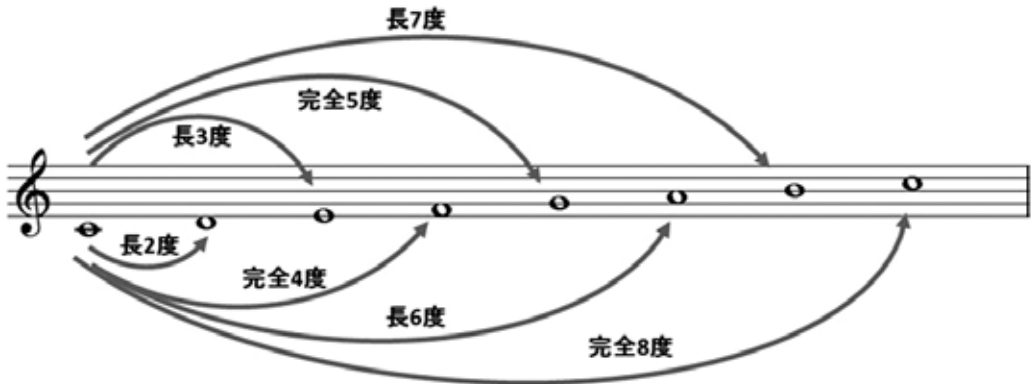
縮小されているために見にくいですが、よく見ると「ミーファ」と「シード」の半音の部分は他の段に比べて半分の高さになっている。1年生の子どもたちがこの絵を見たときに、いったいどれほどの児童がこのことに気づくのであろうか。また、教師はそのことをどのように示しているのであろうか。

(2) ダイアトニック音階の特徴と課題

これまで、ダイアトニック音階とは何か、また小学校の教科書でどのように紹介されているか述べてきたが、ここでダイアトニック音階の特徴や課題を、音楽的、また音楽教育的視点から考えてみたい。

幼児や児童が身につけていく音楽的能力のひとつに「音程感覚」がある。これは、ある音とある音の間の距離である。「音楽」というのは、ある意味「音」の時間的動きであるので、この「音程」というのは、言ってみれば「メロディーの動き」ということになる。ここでは、先に挙げたダイアトニックスケールに含まれている「音程」の種類について考えてみる。譜例2は、1オクターブのダイアトニック音階に含まれている音程を主音の「ド」を基準に示したものである。ダイアトニック音階に基づいて作られたメロディーは「ドレミファソラシ」の7音の中から、基本的には任意の音から任意の音に移動することが可能なので、「ド」を固定した場合でも、

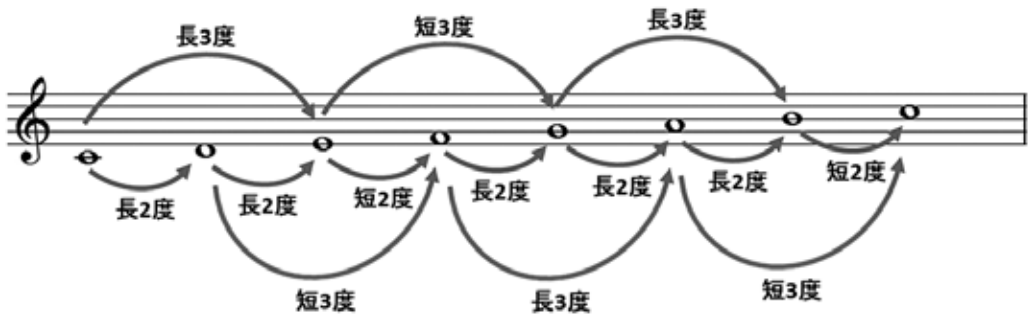
ここに示されているように、7種類の音程が考えられる。ちなみに、ここでは低いドから高いドまでのオクターブ内の音程を示しているが、実際の曲では、1オクターブ以上の音域のメロディーも最近では比較的多くみられるため、ここには出てこないような特殊な音程が使われていることもある。例えば、「シーファ」の音程は「減5度」というかなり特殊な音程であるが、このような音程もダイアトニック音階には含まれているということを忘れてはならない。



譜例2. 主音を基にしたダイアトニック音階に含まれる音程

一般的に、聴きやすく、歌いやすいメロディーというもの、順次進行（隣り合った音への移動）を基に、時々3度のスキップや4度以上の飛躍を用いているメロディーだと言われているが、最近のテレビやアニメの曲には、4度以上の飛躍を連続的に用いたり、かなり速いテンポで飛躍が用いられたりしているものが多くみられるようになってきた。幼児や低学年の児童では、まだ発声や歌唱の能力が十分に発達していないので、大きな飛躍を正しく歌うことは難しい、また、歌うことだけでなく、そのような音程を頭の中でイメージする力（これを「内的聴感」という）も十分に養われていないため、自分が歌うべき音程を頭の中で「聴く」ことができないまま歌うことになってしまう。現代曲や流行りの曲を多く取り入れている幼稚園ではそのような状態で歌を歌うことが普通になってしまい、子どもたちの内的聴感を養う機会が失われてしまうのである。

次に、ダイアトニック音階に含まれているこれらの音程について、もう少し細かく見てみる。「順次進行」のパターンについて調べると、前述の通り、「長2度」と「短2度」の2種類が

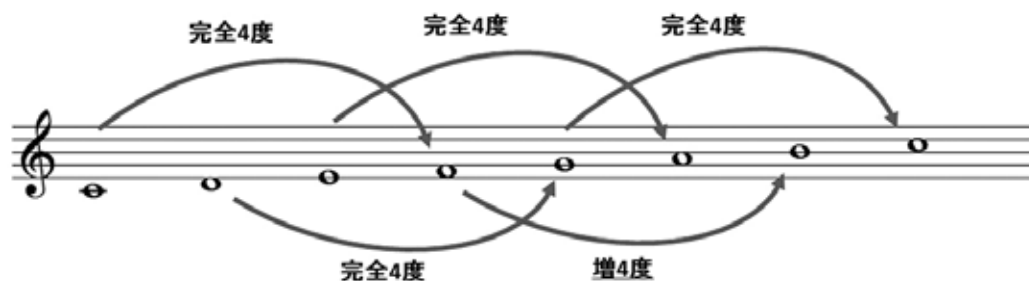


譜例3. ダイアトニック音階に含まれる2度と3度の音程

存在する。そして、スキップと呼ばれる3度の音程も同様に、半音を含まない「長3度」と半音を含む「短3度」の2種類の音程がある。これを示したものが譜例3である。

先ほども少し述べたように、視覚的には五線譜に書かれた音符を見ただけでは、すべて等間隔に見えるので、どこが「短2度」で、どこが「長2度」になるのか判断することはできない。教育芸術社の教科書で見たように、音階というものを等間隔に並んだ風船のように捉えていたのではなおさらである。ピアノなどの鍵盤楽器に慣れていれば、白鍵と黒鍵を頭にイメージしてこれらの区別をすることができるであろうが、特にピアノを習ったりしていない子どもたちは、どのようにこれらの判断をしているのであろうか。どのようにすれば教育出版の教科書に示されていた「半音の高さの違う階段」として音階を理解することができるようになるのであろうか。

ダイアトニック音階に含まれている音程として、最後に4度の音程を見てみる。譜例4はドから始まる1オクターブ内に含まれている4度の音程を示したものだが、ほとんどが「完全4度」であり、下線を引いた「ファーシ」の音程のみ「増4度」となっている。先ほど述べた「シーファ」の「減5度」という音程同様、この「増4度」という音程も特殊な音程である。



譜例4. ダイアトニック音階に含まれる4度の音程

このように西洋音楽を基とした音楽、つまりダイアトニック音階を基に作られた音楽は、非常に複雑な音程がたくさん使われているのである。幼稚園教育要領や小学校学習指導要領ではそれらの音程については何も述べられていない。

(3) ペンタトニック音階とは

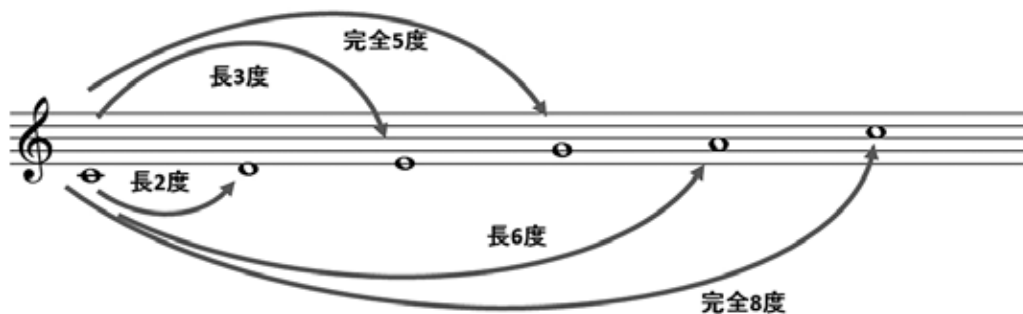
これまで西洋音楽のもとになっている音階について述べてきたが、日本の伝統的な音楽はどのようなになっているのであろうか。下の図は日本のわらべうたや民謡を調べ、音階の種類に分類したものである。(東川清一 2005)

調査曲251曲中

〈陽類〉 ←……ドレミ ソラ ドレミ ソラ ド……→	198
ド旋法	11
レ旋法	93
ミ旋法	6
ソ旋法	15
ラ旋法	73
〈陰類〉 ←……ミファ ラシド ミファ ラシド ミ……→	43
ミ旋法	12
ファ旋法	0
ラ旋法	6
シ旋法	25
ド旋法	0
〈混合類〉 ←……ミファ ラシ レミファ ラシ レミ……→	7
ミ旋法	6
ファ旋法	0
ラ旋法	0
シ旋法	0
レ旋法	1
琉球類	3

図3. 日本のわらべうたや民謡の分類 (132ページ)

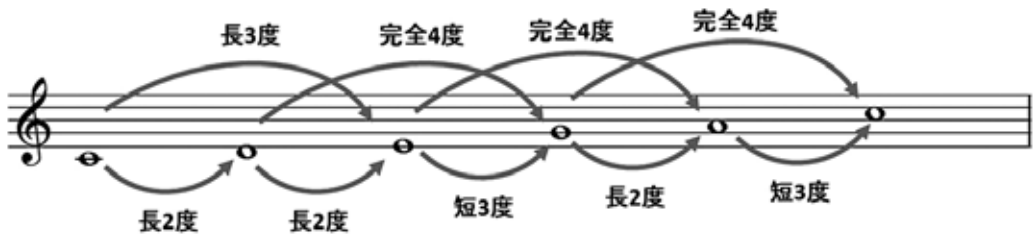
この調査では、日本中から251曲のわらべうたや民謡を、それぞれの構成音を基に音階ごとに分類している。図中の「陽類」とあるのは、日本で最も一般的な5音階（ペンタトニック）である「ヨナ抜き音階」のことを意味している。これは半音の「ファ」および「シ」が含まれていない「ドレミ ソラ」の5つの音でできた音階である。また、真ん中の「陰類」というのは、「さくらさくら」や「うさぎ」で有名な「都節」とも呼ばれる音階「ミファ ラシド」の5



譜例5. ペンタトニック音階に含まれる音程

つの音でできた音階である。陰類の方はわらべうたよりも民謡に多くみられるため、ここでは主に陽類、つまり「ヨナ抜き音階」のペンタトニックに注目したい。先ほどのダイアトニック音階と同じようにペンタトニック音階についてもそこに含まれる音程を見してみる。

ダイアトニック音階にあった4度や7度の音程は歌いにくい、ペンタトニック音階には主音の「ド」からの動きとしては4度や7度が含まれていない。これによって、ペンタトニック音階を基にしたメロディーは、子どもたちにとってかなり歌いやすくなる。さらに、主音以外から可能となる音程の動きについても見てみる。譜例6は、ペンタトニック音階に含まれるその他の音程を示したものである。



譜例6. ペンタトニック音階に含まれるその他の音程

ペンタトニック音階は5つの音しかないため、隣の音に動くためにスキップ（3度）しなければならない箇所があるが、半音階（短2度）が存在しないため、このペンタトニック音階を基にして作られた曲に出てくる順次進行は常に長2度なのである。また、ダイアトニック音階には例外的に出てきた「増4度」や「減5度」のような特殊な音程も一切含まれていないのである。

4. 日本の伝統音楽における主音

これまで、西洋音楽と、日本のわらべうたなどの伝統音楽の特徴の違いを構成音から見てきたが、最後に「主音」という観点から見てみる。西洋音楽においては、長調の曲は「ド」、短調の曲は「ラ」が主音となることは一般的な知識となっているが、日本の伝統音楽においてはどうか。先ほどの図3をもう一度見てみると、一般的なペンタトニックの音階が基になっている曲が198曲あるが、そのうち、「ド」を主音としている「ド旋法」（または「ドーペンタトニック」という）はたったの11曲のみである。これは全体の5%ほどしかない。最も多い種類は、全体の約47%を占める「レ旋法」（レーペンタトニック）である。「レ旋法」の曲は文字通り、「レ」の音で終わる曲であるが、西洋音楽に慣れている多くの人たちにとって、「レ」で終わる曲は「終わった感じがしない」と感じられるようである。

日本で生まれ育ったのにもかかわらず、伝統的な日本の音楽、特に「レ」を主音とした音楽を聴いたときに、「不自然」、「終わった感じがしない」などと感じてしまうのは大変残念でならない。これは我々が、どれほど西洋音楽一辺倒の音環境の中で生活しているのかを如実に表しているのだが、今の大学生にわらべうたや伝統音楽を聴いてもらおうと、やはり「暗い」とか「悲しい」といった感想が返ってくる。しかし、今でも生活の中で伝統的な日本の音楽の「な

参考文献

小原光一ほか (2016) 『小学生の音楽1』教育芸術社.

東川清一 (2005) 『読譜力 伝統的な「移動ド」教育システムに学ぶ』春秋社.

新実徳英ほか (2016) 『おんがくのおくりもの1』教育出版.

文部科学省 「学習指導要領「生きる力」・幼稚園教育要領」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/ (2017年8月12日)